

— 花 信 風 —

1月号の注目歌

ひとり胸におさめることの多き日 入道雲は崩れはじめて

太陽の重みを背中に負うごとく人人下向き駅へと向う

蚊帳吊りて深く眠りし朝四時の草の匂いの涼風に会う

ふりかえり最後の別れと手をふれば叔母も手をふる静かに笑まい

秋彼岸急に涼しくなりましたラフマニノフに夜は更けてゆく

追う時間追われる時間重なりて異なる世界は内にあるらし

だとしても話してくれてありがとうビー玉夏のラムネの瓶の

弾く人を選べぬギターの哀しさを思うことなくギターを鳴らす

あしたにはあしたを生きてゆくためにわたしは今日のわたしをころす

川沿いを墨の気配がぬけてゆく呼ばれたようではいと答える

一時間の草抜き終えて痛む膝老いのきざしは人には告げず

つるむらさきの大きな葉を摘むじかじかと朝から照りて 原爆忌近し

手の平に母の名書きてベランダの満月の光に読んでいるなり

珈琲の豆挽く香りにしばし酔う店主は虐殺のルワンダ語る

何となくサヨクが素敵な時過ぎて自分が左か右かも知らず

真昼間の畳の居間にごろ寝する心地のよさよ醒めずともよし

棚橋和恵 選